

---

# 紅き腕輪 第零章

Earth

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅き腕輪 第零章

### 【Nコード】

N95970

### 【作者名】

Earth

### 【あらすじ】

意識が遠のく・・・  
なぜ意識を失ったのか・・・  
まだ思い出せない  
なんでこんな事になったのか、そしてこれからどうなるか  
まったくもって「理解できん」

## く 腕輪 く

### 第零章 く 墮者<sup>だしや</sup> く 序幕

意識が落ちるような感覚・・・  
そういうモノだと知覚した。

男「ああ、落ちてるのか・・・」

不思議と声を出すことは出来るのだが、体は動かない。  
手は握れるが、腕は重く、動かず。足は神経は通っているものの、  
ほぼ自由に動かせない。

周りは黒いだけ、自分の体すら見えないほどの黒。

男「なんだってこんな事になったんだっけな」

思い出そうとしても頭がうまくまとまらない。

男「そりゃそうか、こんな落下しているような状態でまともに考えるという方が難しいな」

一人で呟いてみるが、誰にも聞こえるはずはなかった。

ふいに、下に柔らかな感覚が訪れた。と、同時に軽い衝撃が男の  
背中を打つ。

男「ぐっ、いつう！」

背中を軽くとはいえ打ちつけて声を漏らしてしまう、それと同時に  
違和感を覚える。

男「ん、動けるの・・・か？」

手の感覚がはつきりと伝わり、自由に動かせる。背中も痛みはあるものの、  
体を起こすことができる。足もちゃんと2本ともついているようだ。

男「ま、死んだ・・・ってわけじゃなさそうだな」

ゆっくりと上体を起こし、辺りを確認してみる。

そこは黒い空間に微かに見える光が射す場所、カチッ、カチッと  
聞きなれた時計の音も聞こえてくる。

男「・・・時計？」

耳を澄ますと確かに「カチツ、カチツ」と時計が正確に時間を刻んでいる音が聞こえる。

どうやら起きた先、目の前から聞こえてくるようだ。

目を細めるように音がした方向を見据える。あつた、確かに『自分の部屋にある柱時計』とそっくりな物が少し離れた位置に鎮座していた。

男「ここは、俺の部屋・・・って事はないな」

当然ながらここが自分の部屋であるはずがない。だとしても、前方にある柱時計は自分の部屋にあるものだという確信が持てた。もちろん推測でしかないが・・・

声「あら、やつとご到着？」

安堵した瞬間『時計』から女のような声が聞こえた。

男「誰だ？」

威圧を含ませようと発した言葉だったが、頭の整理がついていない状態だったのだろう。威圧というよりも困惑した声に聞こえたかもしれない。

しかし、声の主は意にも介さず、一人で言葉を続ける。

女の声「あの婆さん、適当に選んだわけじゃなさそうだし、これはなら大丈夫・・・なのかしら？」

よく見据えると時計の裏から深紅の髪がはみ出している。暗い黒の中でも目を凝らすとはつきりとわかるほどの紅い髪。

男「・・・誰だと聞いているのだが？」

冷静に、ただし警戒はしつつも聞き返す。敵意はない声色だが、正体が分からない状態で油断することは出来ない。ゆっくりと起き上がり、いつでも動けるように少し腰を落とす。

女「ちよつと、あんまり警戒しなくてもいいじゃない。オーナーご主人様になっただからさ」

深紅の髪ははつきりと女と分かる声が答えてくる。と、同時に時計の裏から姿を現した。

女「そう、私は『紅き腕輪』の精霊。あ、名前は無いから後で適当につけて頂戴ね」

女性にしては長身、深紅の髪を腰まで伸ばし、腰に手を当ててこちらを値踏みするような目で見ている。その目が、全身を麻痺させるような感覚に襲われつつも

男「・・・現状が理解できんのだが？」

漫然と、そう答えるしかなかった。

これが始まり　これが出発地点

これが悪夢の始まりであった

第零章　　墮者だしや

序幕

終幕

ゝ 腕輪 ゝ (後書き)

以前よりこのサイトを使っていた友人に勧められ、初の投稿となりました。稚拙な文章ですが、皆様の目にとまって頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9597o/>

---

紅き腕輪 第零章

2010年11月17日04時15分発行